

岡崎森林組合

調査団体名 : 岡崎森林組合 団体代表者名 : 代表理事組合長 眞木宏哉
 設立年 : 2008(平成20)年(岡崎市森林組合と額田町森林組合が合併)。前身をたどれば1921(大正10)年設立の額田郡宮崎「河原土工森林組合」に行き当たる。
 団体URL : <http://okamori.org/> 対応してくれた人の名前 : 代表理事組合長 眞木宏哉
 活動拠点 : 愛知県旧額田町森林組合施設 調査員 : 井上祥一郎、後藤伸也
 取材日 : 2014年2月19日 レポート作成者 : 井上祥一郎

活動内容

人口、約38万人の岡崎市は古い城下町だが、23,300haに上る森林を擁する「森林都市」でもある。当組合は市内にあって、その森林のあり方に責任を負う希少かつ最大の専門技能集団である。制度的には森林組合法に基づく森林所有者の共同組織であり、地域の森林管理の主体として、施業集約化等により森林・林業の再生に積極的役割を果たすことが期待されている。

主な活動内容は、①地域最大の資源でもある森林の「保全整備」と「林産・素材等販売」、②地域の木材の利用が国土資源の保全につながり、流域の人びとの生命にも関わるという事実を踏まえた「木質社会の見える化」という息の長い地域運動である。具体的には、主伐・除間伐・下刈り、枝打ち・作業道作設・集材・造材・搬出・輸送・素材販売・毎木調査・選木・本数調整伐・林地境界(施業界)の画定・団地化説明会・造林事業提案書・・・多岐にわたる。

キャッチフレーズ

岡崎森林組合は、提案力・技術力・経営力で、ふるさとの森のチカラを活かします。

会のモットー(何を大切にしているか)

「のびやか」に活動すること。本組合の職員は以前と違って地元出身者は少なく、ほとんどがターンの人たちで占められている。若者も多い。彼らを引き寄せるのは「森の魅力とそれを発揮させる森づくりの意義」だ。自分たちが経験したような体験がない中で、お互いをのびやかに理解し合い、大切な岡崎の森を守っていくという使命感のもと、提案力・技術力・経営力の向上、共有に努めている。

設立から現在に至るまで変化したこと

この地域では、早くも明治43(1910)年に明治136(2003)年を目途にした長期にわたる森林計画(宮崎村有林事業計画書)を策定し、森林を村おこしのソフト・ハード両面にわたるエネルギー源として位置づけてきた。第2次世界大戦後の復興期やその後の拡大造林時期には既にかんりの蓄積を持っており、森林の地域資源としての貢献は特筆に値する。組合員は、先人の苦勞に感謝し、先見性に学び、さらなる森づくりに汗を流した。

山間地にあっても豊かな地域生活を支えてくれた森林だが、昭和39(1964)年の木材関税がゼロになった頃から材価低迷、森の資産価値の低落という環境下で荒廃の危機に瀕している。

現在では、組合員の所有森林に対する関心も希薄になり、経営・施業の意欲が著しく低下している。

連携している団体・専門家・自治体など

林業振興機構、森林林業技術センター、他の森林組合、三州マタギ屋など。
 岡崎市とはもちろん緊密な連携がある。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

①組合員のための組織、②絆、③森林整備・林産(材の販売)、④原価管理・安全管理、⑤山間地域を含め森林都市(市域の60%)、⑥情報共有、これらの点を意識して活動をしている。専門的になるが、高性能林業機械の活用、施業の団地化・集約化、路網整備等による素材生産性の向上に合わせ、採材・造林技術、販売営業力を高めることが、山村再生や担い手づくりに欠かせない活動である。

現在直面している課題

「組合の灯を消してはならない」が大前提であり、昨今の林業を取り巻く経済情勢の下では、経営の持続が課題である。そのためには、赤字決算を背負った組合の経営構造を変える必要があり、事業の選択と集中が欠かせない。歴史はあるものの、不採算であった木工部門を民間企業に有償貸与し、工場設備をデザイン力・企画力・営業力に活かしてもらえることを期待している。同様に製材部門も縮小した。

今後やってみたいこと

月並みな言い方になるが、まず森林施業の集約化・団地化である。3,000人に上る組合員の所有規模は概して小面積であり、個人単位の施業では森林再生は到底おぼつかない。そのためにも林地境界の明確化が急務であり、行政と連携して少しでも成果を上げていきたい。また、この地域では電力供給力が未熟な時代には、組合立の水力発電所が多く設置された時期があり、製材所や家庭に電力を供給していた歴史がある。水も森の恵みであるが、木質エネルギーも同様である。現在、豊田・新城・設楽・津具・東栄など7つの森林組合があるが、これらが協働すれば、木質エネルギーの安定的供給組織としても機能すると思う。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

林業界の低迷は、木の成長に要する時間軸の長さという宿命とそれに付随する安定的供給体制の不足に一因があるので、広域的な体制整備と情報収集、そのための人材確保とが不可欠になる。

チームオリジナルの質問

<質問内容>外国人による林地買取はないか。

<答え>山の売買はあるが、目が行き届いているので、現時点ではそのような事態は承知していない。列島改造が叫ばれた時代の遺産として、別荘地やゴルフ場がある。額田にも2カ所のゴルフ場がある。当初は流域への環境影響が懸念されたが、地域の雇用と活性化の上で一定の評価を得ている。岡崎市と豊田市の境に、県企業庁がトヨタテストコースを造成中だが、岡崎側は緩衝緑地、設備等は豊田市側で税収に大きな差があると取沙汰されている。

その他、伝えたいこと

イノシシなどの害獣被害が中間山間地に見られるが、市域にはシシ垣が延長50~60kmも残されている。石積みの壁の山側はオーバーハングするように積まれているなど、先人の工夫の跡が残っており、この復元を目的として「万足平を考える会」が発足した。地域の歴史の見直しになろう。

先に触れた明治136年計画について述べたい。山のポテンシャルを地域改革に活かそうとしたのが、初代宮崎村村長・山本源吉。明治中期、源吉は先進の八名郡山吉田村に学び、山焼き廃止、部落区有林の改良、造林奨励を進めた。山焼きが造林に切り替わり、500町歩の村有林が設けられ、明治43(1910)年「愛知県額田郡宮崎村有林事業計画書」が策定され、その30年後の昭和12(1937)年、植林が完了した。同計画書は総論、地況、林況、沿革、村治、地方経済、造林、保護、収支概定、結論の10章からなる。「収支概定」の章では明治136(2003)年度までの「理想収入」を掲げ、総額192万4191円89銭(現時点ではおよそ210億円)を見込んでいる。そして、皆で造林した山林を至宝として村民協力の下に経営していけば、卓越した財源を得、自治の発揚を図ることができると、森林経営の意義を説いている。「宮崎村」を受け継いだ現在の岡崎市域の山林の状況はどうか。市域の6割に及ぶ森林資源は、先人の望んだ地域の至宝に値する存在であろうか。健康な森と活力のある林業は、郷土岡崎が先進都市としての持続可能性を高め、強靱な立ち位置を確保する必須条件である。先人の志と実践に学びつつ、再生と活性化を探っている。

写真



眞木組合長



岡崎森林組合



愛知県産間伐材使用の看板



岡崎森林組合 製材所